

出題分析			
試験時間	75分	配点	125点
		大問数	5題
分量（昨年比較）	〔減少〕 同程度 増加	難易度変化（昨年比較）	〔易化〕 同程度 難化
<p>【概評】</p> <p>昨年と同様、大問5題の構成。〔1〕,〔2〕が理論分野,〔3〕が無機分野,〔4〕,〔5〕が有機分野からの出題であり、有機分野の占める比重が相変わらず大きい。理論分野では、九大頻出の「反応速度と平衡」からの出題はなく、「結晶格子」「溶液の性質」「電池・電気分解」からの出題であった。有機分野では、九大頻出の高分子化合物から「糖類」の構造に関する問題が出題された。出題形式としては、例年出題される正誤問題はあまり見られず、空所補充問題の出題が目立った。また、昨年のような煩雑な計算問題は出題されておらず、設問数も減少したため、全体として易化したといえる。典型的な計算問題や基本的な知識を答える問題を確実に得点することが合格へのカギとなるだろう。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
〔1〕	結晶格子, コロイド	(1)は結晶格子に関する問題。いずれも標準的な設問。問3は単位格子の図が描ければ解答できるだろう。(2)はコロイドに関する問題。問6は本文中からコロイドの電荷を読み取る必要がある。アミノ酸と同様に考えればよい。 空所補充2問, 知識・選択3問, 計算2問。	標準
〔2〕	燃料電池, 電気めっき法	(1)は燃料電池に関する問題。問2は標準電極電位から起電力を求める問題であり、誘導がないため一度触れたことない受験生にとっては厳しい。(2)は電気分解を用いためっきに関する問題。初見の反応ではあるが、反応式が穴埋め形式になっており、誘導に従えば解答できる。 空所補充1問, 反応式1問, 計算3問。	標準
〔3〕	肥料	肥料の三要素に関する総合問題。問1は過リン酸石灰に関する知識が必要。問2は新課程から導入された化学反応が自発的に進む要因に関する空所補充問題。エントロピーを理解しておく必要がある。 空所補充2問, 知識・選択1問, 計算1問。	標準

設問別講評			
〔4〕	脂肪族化合物の構造決定	C ₆ H ₁₂ O の構造決定問題。問 2 の解答にはザイツェフ則の知識が必要。問 4 の KMnO ₄ による酸化開裂で二酸化炭素が発生することについても知識が必要だろう。問 5 も含め、構造決定問題は標準的。 構造式 3 問，知識・選択 1 問，計算 1 問。	標準
〔5〕	単糖の構造，保護基を用いた二糖の合成	(1)は単糖の構造に関する問題。問 2 ではフィッシャー投影式で表す必要があるが，グルコースの例を参考にすればよい。(2)保護基を用いた二糖の合成に関する問題。保護されていないヒドロキシ基が反応することと，1 位のヒドロキシ基の立体配置が変わることがわかれば解答できる。全体として戸惑った受験生が多いだろう。構造式 2 問，空所補充 1 問，知識・選択 1 問，正誤判定 1 問。	標準

合格のための学習法

九大の問題は、例年基本レベルの空所補充問題や標準レベルの計算問題などの解きやすい問題と、思考力を必要とする応用問題がともに出題される。日ごろから教科書を熟読し、問題集などをこなすことで標準レベルの問題を難なく解答する能力をまずは付けたいところである。基礎力が付いたのち、過去問演習などを通して、応用力の必要な問題に対処する力も十分に養っておく必要があるだろう。また、比重の大きい有機分野は、現役生の学習が遅れがちになる単元でもある。有機分野、特に高分子化合物に関する学習も隙のないようにしっかり行っておく必要がある。